

庵治石を世界へ

ドバイの日本食レストランに 多数の「庵治石」製品を設置

香川県・庵治産地 (有)石材商太元屋

庵治石の採掘から加工・施工まで一貫して手掛ける(有)石材商太元屋(香川県高松市/和泉憲社長)は、墓石の加工・卸を主力としつつ、近年ではホテルや飲食店などからの依頼により、庵治石を用いた建築材やアート作品の製作・施工も数多く手掛けてきている。今年6月には、中東ドバイにオープンする日本食レストランへ庵治石製品を納品し、施工にも携わった。今回のプロジェクトについて、同社の和泉憲社長と奥さまの恵美さんにお話をうかがった。

庵治産地の 協力体制で実現

今回の依頼が寄せられたきっかけを教えてください。

憲 恵美さんが手掛けている「Le Mayo(えもよ)」のSNSを通じて知り合った方からご相談をいただいたのが始まりでした。ドバイでオープンする日本食レストラン

の設計を担当される建築士の方が、「庵治石を使いたい」とお話されていた」と伺い、詳しく内容を聞いてみたところ、長さ10メートルを超えるメインカウンターをはじめ、階段や壁面など、200点以上の庵治石製品を使用したいという要望でした。

契約が1月、現場への納品が6月中旬というタ

イトなスケジュールで、正直迷いもありましたが、「これはやるしかない」という使命感のような気持ちもありました。地元・庵治産地の協力会社の皆様にご尽力いただき、約1ヵ月半で全ての製品を仕上げることができました。

大きな一枚石が必要だったため、庵治石の調達も課題となりました

が、丁場の方々の協力もあって、スムーズに作業を進めることができました。改めて、産地内の協力体制のありがたさと大切さを実感しました。

梱包・輸出手続きは 恵美さんが担当

輸出の梱包作業や手続きなどは、恵美さんが担当されたと伺いました。恵美「知らぬが仏」で正直、こんなに大変だとは思っていませんでした(笑)。

まず、通関士をしている友人に相談し、輸出入業務に詳しい方を紹介してもらいました。その方についてお任せしても良かったのですが、人任せ



和泉憲社長と恵美さん

にせず、自分でやることに意味があると思ったんです。次があるかどうかはわかりませんが、自分で経験しておかないと次には繋がらない。勝手にそう思い込んで、勉強しながら進めていきました。梱包については専門業者の方に協力いただき、万全の状態で作上げました。そこから約1ヵ月半かけて現地まで届けていただきました。諸々の手続きや、現地とのやり取りは時差もあって大変で

現地での 施工エピソード

現地ではどのように施工していったのでしょうか。

憲 日本からは私と、海外で施工実績を持つ静岡の庭師さんの2人で現地入りしました。現場には様々な国から集まったスタッフがいいて、その技術力の高さに驚かされました。若いスタッフも多かったのですが、中には現場の状況に合わせて自分で工具を作ってしまう人もいて、本当にすごいなと思いましたね。

海外に向けた 「庵治石」のPRも

今回の仕事を終えられた今の感想をお聞かせください。

憲 今回の仕事は、何よりも地元・庵治産地の協力体制があつてこそ実現できたものです。そして現地へ施工に携わってくださった方々のご協力の賜物です。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。



現地で共に作業をしたスタッフと記念撮影

庵治石を使用したレストランは、5つ星ホテル内にある日本食レストランという点もあり、地元でも注目度の高さを感じました。施工中には現場の関係者から「これが世界一の庵治石ですか?」と声をかけられたり、「とてもかっこいい」とお褒めの言葉をいただいたりと、多くの方々が庵治石に興味を示してくださいました。

このレストランは9月12日にオープンしました。ドバイは非常に活気のある都市で、世界各国から多くの人々が訪れていますが、ドバイは親日の方も多く、そうした方々に「庵治石」を知っていただけたら、またとないPRの機会になると思っています。

今回の経験は自分にとって大きな自信となりました。今後も当社の主力である墓石の加工・卸、建築材としての庵治石の活用・提案を進めていながら、海外に向けた庵治石の魅力発信にも力を注いでいくつもりです。

業界全体として厳しい話題が多い中ではありますが、海外に目を向けることも、新たな可能性を切り拓いていく一つの方法ではないかと考えています。これからも自分たちが出来ることを一つひとつ実践していくことで、庵治石と庵治産地の発展に少しでも貢献していきたいと思っています。

◆(有)石材商太元屋

香川県高松市牟礼町牟礼3720-360
TEL087-845-1114



長さ10メートルを超えるメインカウンターをはじめ、階段や壁面など、200点以上の庵治石製品が設置されたドバイの日本食レストランの店内



施工時の様子。スマホの通訳機能を使ってコミュニケーションをとりながら作業を進めていった。なお、ドバイでは男性は髭を蓄えることが一般的のようで、和泉憲社長も現地の慣習に合わせて髭を蓄え、作業に臨んだという。

